

浄土

www.hyjcdp.jp

2017 July August

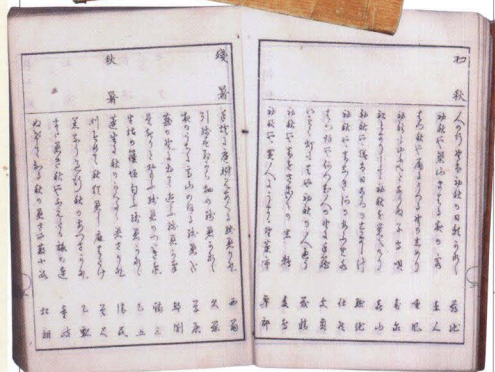
7/8

法然上人鑽仰会

貧乏骨董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー



和装本。天地 180 ミリ、左右 117 ミリ。秋の部は 132 ページ、冬の部は 122 ページに跋文が 2 ページ、奥付が見返しに刷ってある。かがり糸はそれぞれ違うところを見ると、あとからの補修によるものだろう。下は秋の部の句稿部分見開き

は次の元号である。区分的には幕末ということになる。この慌たらしい世相のなかで詠まれた句を約五千句集めたものがこの本（春夏秋冬の四部）なのだろう。明治維新まであと四年しかない。

版元の鈴木喜右衛門は日本橋で多くの書物を刊行している。其同刊行の英文蔵は下谷御成道の書肆である。これは冬の部の奥付に記載されている。この奥付には興味深いことが記されている。それについては次回みていきたい。

『俳諧文久千三百題』の「秋乃部」と「冬乃部」である。当然「春」「夏」もあるはずだが、骨董市の露店にはこの二冊しか並んでいなかった。一冊五〇〇円である。バラバラとページを繰ると、私にはとても読めないくずし字で、俳句（発句というべきか）がぎっしりと並んでいる。これを暇なときに解読するのも楽しいかもしれないと、二冊とも買い求めた。

秋の部には三五五の季語（季題）と俳句が四〇二句、冬の部には二八八の季語と一二六句が収められている。句稿部の初めに「三戒堂芳草撰 潤雨堂草甫校」と記載されているが、これは秋の部だけで冬の部にはない。冬の部の最後に跋文が二ページと奥付が見

返しに印刷されている。

欠落したページや破れもないし状態はそれほど悪くはない。かがり糸が緩んでいることと、あとからの補修によるものだろうが糸の違いが見られる。

国立国会図書館のデータベースによると、著者は芳草と潤雨堂草甫となっている。出版地は江戸で、版元は鈴木喜右衛門。出版年は一八六四年とあるから元治元年である。「共同刊行・英文蔵（ほか）」との注記もある。ところが早稲田大学古典籍総合データベースでは発行は文久三（六三）年、出版地、出版者は不明。おそらくタイトルルの「文久」から、文久最後の三年としたのだろう。文久時代はわずか三年しかない。元治

茨城・石下

西福寺

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

寺院紀行



茨城の名門、下妻第一高校時代の生徒会会長と副会長だったという西福寺中禪正史住職と奥様の和子さん。



寛永九年（一六三二）創建の西福寺、本堂を支えているのは当時からの柱だという。



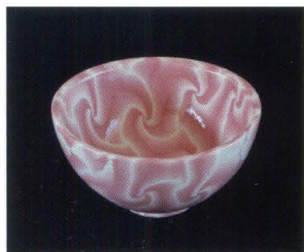
御忌での受付は主に茨城教区青年会が担当された



お練り行列はこの御忌に合わせ修理された大門から始まった



多くの参拝者や観光客が見守る中での洒水作法。ゆったり堂々とこなされた



御忌唱導師記念の引出物のぐい呑み。
松井康陽氏の作品で、箱書きは棕灰
釉練上酒呑



大殿高座で増上寺法主八木季生台下より授かった松子を振る



法然上人像の前に宣疏を朗々と
読み上げる中篤住職



大人数での記念撮影も終え、檀家総
代や家族親族揃っての身内での記念
撮影。笑顔がこぼれている



まるで中興住職の唱導師を祝うように天井からひらひらと舞い落ちてきた散華。荘厳と相まってまるで極楽浄土



西福寺内陣。向かって右の脇陣は
平将門一代記の絵が飾ってある



東日本大震災で倒れるも修復された
西福寺本尊、阿弥陀如来立像



中瀛住職が理事長、園長を務める(学)
寿広学園石下幼稚園。この幼稚園の
ホールが空手道場も兼ねている。隣
接して保育園もある



平成27年に竣工した新しい客殿。
右手が霊場が浮かぶ池になっている



天明の飢饉の救済事業として西福寺
境内につくられた大師霊場。毎月
21日は縁日がたつ

浄土

2017/7・8月号 目次

カラーグラビア=寺院紀行 茨城 石下 西福寺	写真=真山剛	1
連載 私の好きなご法語	阿川文正	6
連載 法然上人と親鸞聖人(十二)	林田康順	8
寺院紀行 茨城 石下 西福寺	真山剛	14
連載 響流十方	袖山榮輝	20
連載 江戸の川を歩く	森 清鑑	24
連載小説 渡辺海旭 ⁸⁰	前田和男	30
連載 誌上句会	選者=無縫庵烏鷺坊	40
連載 マンガ さっちゃんはネツ	かまちよしろう	43
編集後記		44



表紙題字=中村康隆元浄土門主

表紙写真=鬼海弘雄

アートディレクション=近藤十四郎

協力=迦陵頻伽舎

源空はすでに得たる心地にて

念仏は申すなり

この言葉については、以前にも述べた事がありますが、法然上人の「常に仰せられける御詞」の中で、私が最も大切に行っている御法語の一つであります。この御法語は『四十八卷伝』第二十一に載せられているもので、念仏者の大切な心構えを教えられたお言葉であります。

このお言葉の前文を見ますと、「人の手より物をえんずるに、すでに得たらんと、いまだ得ざると、いづれか勝るべき」とあります。

つまり人から物を戴こうとする時に、すでにもらってしまったものと、まだもらわないでいるのと、どちらが勝るであろうか。それは申すまでもなく、もらってしまった方が、心が安らかであって、これと同じように、

「私（源空）は、いつも浄土往生がすでに定まった心地で念仏を申している」とお示しになられたのであります。このお言葉は、誰にも分かる身近な譬えではありますが、念仏を称えれば、阿弥陀仏は必ずお救い下さるという確信（決定心）を持つべき事を示されたお言葉であります。

お念仏する心構えとして最も大切なことは決定心を持つこと、お念仏を称えれば阿弥陀仏に救済されるという、確固たる信念を持つことであります。

法然上人は『浄土宗略抄』の中に、「心の善悪をもちへり見ず、罪の軽き重きをも沙汰せず、ただ口に南無阿弥陀仏と申せば、佛の誓いによりて、必ず往生するぞと決定の心を発すべき也。その決定の心によりて、往生の業は定まる也」と述べられております。

日々の念仏生活の中に決定往生の確信を持つことができれば、明日の日も、来月の月も、臨終時の浄土の往生は確かであります。み佛の大慈悲心、光明の中に育まれてゆく安らかな信仰生活を、法然上人はお導き下されたのであります。

「生死ともにわずらいなし」とのべられたお言葉にも、私どもは宗教生活の極めて尊い心境を窺うことができますのであります。

大本山善導寺法主

阿川文正

台小

法然上人 と親鸞聖人

【連載十二】——法然上人が捉えたお浄土①——

林田 康順

(大正大学教授)

極楽浄土——所求——

阿弥陀仏（所帰）、選択本願念仏（去行）に続き、私達が求める所（所求）は、阿弥陀仏がすべての衆生に用意された極楽浄土です。極楽浄土について「浄土三部経」には次のように説示されています。

法蔵菩薩、今すでに成仏して、現に西方にまします。ここを去ること十万億刹なり。（『無量寿経』聖典一・二三六）

（試訳）今、法蔵菩薩は、すでに阿弥陀仏として成仏し、現に西方極楽浄土にいらつしやる。極楽浄土は、この娑婆世界から十万億の仏土を隔てた場所にある。）

これより西方、十万億の仏土を過ぎて世界あり。名づけて極楽という。その土に仏まします。阿弥陀と号したてまつる。今現にましまして説法したまう。（『阿弥陀経』聖

典一・三二六

（この娑婆世界から西方に十萬億の仏土を隔てて世界がある。極樂浄土と呼称される。その国土に仏がおられ、阿弥陀仏と号されている。今、現に極樂浄土にいらつしやつて説法されている。）

法然上人は、こうした極樂浄土を私達に勧める理由を次のように述べられます。

十方に浄土おおけれど西方を願うは十惡五逆の衆生の生まるる故なり。（『一紙小消息』
昭法全四九九）

（試訳）お浄土は十方に無数にありますが、阿弥陀仏の西方極樂浄土への往生を願う理由は、十惡五逆という罪を犯してしまった人でさえ往生が叶うからです。）

つまり、すべての世界に無数に存在する浄土の中、阿弥陀仏の極樂浄土だけが、煩惱にさいなまれ続ける私達のような凡夫であっても、輪廻を繰り返す迷いの世界を離れ、速やかに成仏が叶えられる場なのです。私達のような凡夫が、速やかに成仏が叶えられるのはいったいなぜでしょう。もちろん、その最大の理由は、極樂浄土において阿弥陀仏ご自身が私達に親しく法を説き伝えられ、すべての環境が私達が悟りの境地へと導いてくれるからに他なりません。それに加えて私は、極樂浄土に往生し、菩薩の仲間入りを遂げた私達が、先立たれた方々と再会を果たすことができ（『俱会一处』）、この娑婆世界に遺した方々をお浄土に導く働きに努めることができる（『還相回向』）からであると受けています。

俱会一处が叶う場

そもそも「俱会一处」という言葉は『阿弥陀經』に説かれています。俱会一处の理解を

巡って法然上人は、恵心僧都の『往生要集』に説示される「浄土十楽」（お浄土での十種の功德）の中、この世で恩を受け、ご縁を結んだ方々を思いのままにお浄土に導くことができる「引接結縁楽」、そして、お浄土で多くの聖者達と出会い親しく交わることができる「聖衆俱会楽」を踏まえて、『阿弥陀経釈』において次のように述べられます。

恵心僧都、ここを以て聖衆俱会楽と名づくと。聖衆とは誰ぞや。即ちこれ普賢・文殊・弥勒等これなり。（中略）又、いまだ、ただこれらの聖衆に会するのみにあらず。よく我等、無始よりこのかた、父母・師長・朋友・知識・妻子・眷属、前に去る者あり、けだしまた相見することあらんか。これを以てこれを思うに、生々世々、父母・師長・妻子・眷属・朋友・知識に相見せんと欲するものは極楽に往生すべきなり。（昭法全一三四）

〔試訳〕『往生要集』において源信は、『阿弥陀経』所説の「俱会一処」を通じて、聖衆俱会楽と名付けられました。聖衆とはどなたのことを指すのでしょうか。すなわち、普賢菩薩や文殊菩薩、弥勒菩薩といった方々を指しています。（中略）また、こうした菩薩に限ってお浄土でお会いできるといふわけではありません。私達には、量り知れない過去世から今生に至るまで、両親・先生や先輩方・友人・仏の教えに導いて下さった方・家族・親戚など、先立たれた方々がおられます。私達は、こういったかけがえのない大切な方々といつたいどうすればお会いすることができでしょうか。

こうしたことを考えてみるにつけ、私達一人ひとりが過去世から今生に至る迄に巡り会ってきた両親・先生や先輩方・家族・親戚・友人・仏の教えに導いて下さった方など、先立たれた方々に再会したいと望むのであれば、お浄土に往生すべきでありましょ

う。

なるほど私達は、これまでに数え切れない程の生まれ変わり死に変わりを繰り返してきました。そうした中で、両親や祖父母、先生や先輩方、家族・親戚、お友達など、多くの方々との出会いと別れを繰り返してきたお互いです。法然上人は、そうしたかけがえのない大切な方々と再会したいと望むのであれば、極楽浄土に往生しなさい、と語りかけて下さるのです。実にお優しいお言葉です。

尊いご縁——隔生即忘——

私達凡夫は、生を隔てれば、すぐに過去世のことを忘れてしまいます（隔生即忘）。かの弘法大師も「生まれ生まれ生まれ生まれて生の始めに暗く、死に死に死んで死の終わりに冥し」（『秘蔵宝鑰』）と告示しです。私は五十二歳になりました。母が私を産んでくってから五十二年が経ったのです。とてもありがたいことです。その一方、私は凡夫ですから、それ以前の私の命のことなどまったく覚えていません。そして、このまま命を終えれば、この六道輪廻の世界を自力で抜け出すことなど到底できないので、私は再びこの迷いの世界を繰り返すことになってしまうのです。

その時、今生でのさまざまなお出もすぐに忘れ去ってしまうことでしょう。すなわち、まさに今この生涯において私のことを育てていただいた父や母、見守って下さった祖父や祖母、互いに支え合った妻や子供達、あるいはご指導いただいた先生や先輩方、共に語り合った多くの仲間達、学びを深めた教え子達、そういつたかけがえのない大切な方々との決して失いたくないご縁をこのままでは失ってしまうのです。法然上人は、こうした尊い

ご縁を失わないためにも極楽浄土に往生しなさいとお示し下さったのです。

俱会一処の尊さ

法然上人は、俱会一処のありさまについて次のようにお示しです。

ただかまえておなじ仏の国にまいりあいて、蓮の上にてこの世のいぶせさをも晴るけ、ともに過去の因縁をも語り、たがいに未来の化道をも助けんことこそ、返す返すも詮にて候べき。〔『正如房へつかはす御文』昭法全五四〇〕

〔試訳〕 私もあなたも阿弥陀さまの同じお浄土へ往生してそこで出会うのだということをよくよく心得て、蓮の台でこの娑婆世界での憂いを晴らし、それまでの因縁について語り合い、また娑婆世界に還って共々に助け合い、人々を教え導くことこそが一番大切なのです。〕

つまり、先立たれた方とお浄土で再会したならば、前世で経験した悲しかったこと、辛かったこと、その反対に嬉しかったこと、楽しかったこと、こうしたさまざまな因縁について、あんなこともあつたねえ、こんなこともあつたねえと語り合うことができるのです。これが俱会一処で叶えられる尊い功德です。

法然上人は、俱会一処の喜びを次の「花の台のご詠歌」に託されています。

露の身は ここかしこにて きえぬとも 心は同じ はなのうてなぞ

〔試訳〕 朝露のように儚い、この私の今生の命は、老少不定、いつどこで息絶えることになるかは分かりませんが、あなたのみ心と私の心は、必ずや阿弥陀仏のお浄土の蓮の花の台で再会いたしましょう。〕

私達は、どれほど長生きしようとも、自身の死の瞬間に過去を振り返った時、「露の身」であることを確認するのでしょうか。さらに、私達がいつどこで命の終わりを迎えることになるのかなど、誰にも分かりません。まさに老少不定です。しかし、いつどこで、どのような形で死を迎えようとも、お念仏を称えていれば、私達の行き先は必ず一つ、阿弥陀仏のお浄土に他なりません。そこで、先立たれたかけがえのない大切な方々と再会し、あらためて心と心のふれあいを深めて、たくさん思い出話に花を咲かせることができるのです。

宗教離れ、寺離れがどれほど叫ばれようとも、今も多くの方々がお寺を守り、大切にしてお下さいます。真摯にその理由を考えた時、俱会一処をめぐる法然上人の一連の説示の中にこそ、その回答があることに気付かされます。そして法然上人が、俱会一処の叶うお浄土を説示できたのも、法然上人が正依の經典に定められた「浄土三部経」の一つ、『阿弥陀経』の中に「俱会一処」と説かれているからに他なりません。「浄土宗でよかったなあ」とあらためて感謝せずにはられません。

（続く）

寺院紀行

茨城・石下

西福寺

文・撮影／真山剛



参道から山門を望む。右手に石下大師霊場が、左手の観音山には平将門の碑が建つ

巻頭カラー頁に、鮮やかな桜色の洒落た紋様のぐい呑みの写真がある。茨城県笠間市に月窓窯を構え、独自の工夫で新しい陶器を生みだし人間国宝となった故松井康成氏、その長男松井康陽氏の作品である。

寺の行事などで用意される引出物はほとんどが仏具関係らしいが、この洒落たオリジナル陶器を引出物のひとつに加えたのは、大本山増上寺の最大行事、浄土宗宗祖法然上人への報恩謝徳の意を表する御忌大会、その唱導師という大役を果たされた西福寺第二十六世、中寫正史住職である。

「十年後にこのぐい呑みを見て、『ああ、そういうえば中寫の記念品だったな』と思い出してもらえれば、と敢えて特別注文のぐい呑みにしたのです」と中寫住職。

「お願いした松井先生は陶芸家として有名ですが、同じ浄土宗茨城教区の月窓寺住職で、こちらの依頼を受け、増上寺の御忌が毎年桜の季節に開催されるからと、この華やかな作品を提案してくれました」

中寫住職が唱導師を務めた平成二十九年四月五日は快晴、まさに桜満開の一日だった。御忌の一週間前に電話取材した時に、心持ちを話された後に当日の天気を気になされていた中寫住職、当日はこれ以上ない御忌日和となり、増上寺ならではのお練り行列もひときわ華やかなものになった。

増上寺の御忌名物ともいえるお練りは大門から始まった。震災と戦火を免れ創建当時の姿を保っている日比谷通りに面する増上寺の三解脱門（いわゆる山門ではなく三門）は有名だが、その三門とＪＲ浜松町駅の間にあるのが大門で、実は昨年、所有権が増上寺に戻り、御忌に合わせて修復されたのである。

お練り行列は先進から始まり旗、木遣、寺侍、随喜寺院（中寫住職と縁の深い僧侶）、詠唱を唱える増上寺吉水講議員、お稚児さん、式衆などが二列になって公道を練り歩くこともあり、港区の観光行事化している。その行列の中にひととき目立つ姿の一群がいた。中寫住職が師範を務める日本空手協会石下支部



客殿の内仏には御忌唱導師の記念の品が供えられている

の生徒、大正大学空手部員などの空手着姿の
少年少女たちである。

この珍しい道着姿も含め二百メートルにな
ろうかというお練り行列の後方、朱の大傘を
従えて唱導師を務める中寫住職がゆったりと
歩を進め、増上寺大殿（本堂）前の庭儀台に
上がる。左右にはずらりと随喜寺院、後ろに
は親族や総代世話人などの寺院関係者、そし
て一般の参拝者や見学者が庭儀台を囲み、大
殿への階段左右や回廊に所狭しと並んでいる。
好天も手伝って、二千人近い観衆となった。
「唱導師を務める御忌の案内を皆さんに出す
時に、詳しいことを書かなかったこともあり、
檀家さんや空手の生徒の父兄など七台の団体
参拝バスで参拝いただいた皆さんは、私の役
割を知らずに、随喜いただいた長い行列のお
坊さんの中から私を探し出そうとしたらし
く、『こんなに大勢で、しかも頭に何か被っ
てるし、御前さん（地元での住職の呼び方）
見つけれないわよね、せっかく来たのに』
ということになったそうです。あきらめかけ

た時に朱の大傘の下の私を見つけたのですか
ら、それこそ歓声が上がったそうです（笑）」

後日の取材で伺うには、高速道路を使えば
都心から一時間の距離ながら、増上寺の御忌
を見に行つたことがある檀家や地元の人とは
とんではないそうで、初めての御忌を見る人
にとっては、大本山の大法要の主役が、なん
と中寫御前！ というのに大いに驚いた。翌
日の西福寺界限は、中寫御前の晴れ姿の話で
持ち切りとなったに違いない。また、参列し
た方々の話を聞き、参列できなかった多くの
檀家さんが大変残念がったという。

そうした中寫住職の晴れ姿を生で見られな
かった檀家さん、後日、記念写真や増上寺の
寺報や仏教系新聞の記事などでその模様を見
たり読んだりしたとは思いますが、この『浄土』
では参拝された方も知らない中寫住職の、そ
の時の心境をお伝えしよう。

「会奉行から、法主（増上寺住職）以外には
笑顔は見せないようにと言われ、緊張の度合
いが一層高まりました。お練りから庭儀式、

祝宴で披露された空手の型。真ん中
の女の子が中寫住職のお孫さん



本堂で法主からの弘子受け取り、宣疏の読み上げ、散華に行道、そして退堂後の随喜寺院へのお礼の挨拶、大殿前での記念撮影と、連続と続く法脈へ報恩感謝の気持ちで湧きあがってくるはずだったのですが、それを緊張が押さえていたようです。これ、本音です（笑）。

祝宴の終わりになつてようやく、唱導師を務めさせて下さった檀家の皆様、随喜寺院の皆様、増上寺様、茨城教区諸大徳、西福寺関係者、そして家族、と多くの方々への感謝の念と法然上人への報恩謝徳を実感したのは「

中寫住職、飾らない素敵なお人柄だ。

ではその中寫住職の寺、壽廣山觀音院西福寺の話に移ろう。

寺伝では寛永九年（一六三二）に本寺となる水海道の飯沼弘経寺の第十世照誉了學上人を開山、名主の小口孫兵衛を開基として創建されたとある。

前年に徳川幕府から新寺建立禁止令が出されていることを考えると、二代將軍徳川秀忠の葬儀の導師を務め、増上寺の第十七世に

なっている高僧の了學上人を贈り開山として、近隣の一心寺、大日堂、横堤庵などをまとめ、新石下に建立された寺のようである。今は無き石毛城下にある本石下の曹洞宗興正寺、親鸞聖人と縁のある浄土真宗東弘寺の間に位置し、石下の新寺と呼ばれていたことからこうした成り立ちが推測できる。

開基であり大檀那だった小口孫兵衛は、石毛城主の小田家の家老だったが、結城城の城主となった徳川家康の次男結城秀康が福井に改易となると一緒に移ったものの、秀康が若死にするとこの地に戻った。その時はすでにこの辺り一帯は伊奈忠次管轄の天領として新田開発が大いに進められていたことから、孫兵衛は農民に転身、新田を開発し新石下の名主となった。孫兵衛新田の名は今も残っている。そして、この地に西福寺を建立したのである。小口家の立派な墓苑が西福寺前のバス道路を超えたところにある。そのうえ、この西福寺開基大檀那である小口家の血が西福寺の中寫家にも流れることになる。



西福寺開基の小口孫兵衛をはじめとする小口家の先祖が眠る小口家墓苑。左の碑は中寫住職の母、ルリ先代住職夫人が建立された

西福寺第二十三世山崎方琇住職の旧姓は小口。そう、開基小口家の末裔だ。その方琇は、僧侶の人名辞典に掲載される高僧、中寫琇瑞住職（西福寺第二十二世）に弟子入りし、法灯を継ぎ、その息子の正方が二十五世、正方の息子の正史が二十六世と続くのである。二十四世が抜けているのは正方が若くして浄土宗の宗務に籍を置き中国大連の布教師となっていたからである。その正方は現地召集されるが、終戦後の昭和二十一年には無事西福寺に戻ってきて三人の子供を儲ける。二人の女兒と一人の男児、中寫正史住職である。

少し未来の話になるが、中寫住職には三人の男の子がいて、全員浄土宗僧侶となっている。長男達也師は弁理士を経て副住職に。次男祐慈師は中寫住職が始めた社会福祉法人の老人ホームの施設長、二年前の鬼怒川決壊時に浸水した施設の復興に尽力した。三男春希師は同じ法人の保育施設で大活躍。地元石下、古河、都内5カ所と横浜などにある各施設を母である和子さんと一緒に飛び回っていると

いう。余談だが、中寫住職と和子夫人は、下妻第一高校時代の生徒会の会長と副会長で、そうした両親を見て育った長男も学生時代の友人と結婚、祝宴で空手の型を披露した六歳の女の子さんと可愛い僧侶姿で参列した四歳の男の子の父親である。下の二人の弟さんたちもすでに家庭を構えている。昨今の結婚が遅くなる一方の風潮はどこ吹く風である。

さて、ここで中寫住職の空手の話に移ろう。

高校時代にブルース・リーに憧れ下妻にある空手道場を見学、空手のとりことなった中寫住職、大正大学文学部福祉学科で勉強しながら空手部に。四年生では主将も務め、最高成績は全日本大学選手権団体の部、東日本大学選手権団体の部とともに三位というから凄い。聞くと、大正大学の空手部監督は浄土宗の僧侶が多く、北は北海道から南は長崎まで、あつと言う間に七人の浄土宗僧侶の空手部監督の名前があがった。

中寫住職は大学卒業と同時に石下幼稚園のホールを石下支部稽古場として道場を開く。

西福寺が土地を提供した公立の自動車学校。今は映画の撮影に使われているという



新石下から下妻の道場に通っていた生徒など、子供から一般まで六十名近い生徒が集まった。その道場に三人の息子たち全員が五歳になると空手を習い始めた。ちなみに達也副住職の長女が空手を始めたのが、約一年前の五歳からだそうだ。

お寺の案内が最後になってしまったが、西福寺本堂は創建当時の伽藍で、東日本大震災で瓦も土壁の土もすべて落ち、マッチ棒のような（住職談）柱だけが残ったが、敢えてそれを活かしての耐震補強にしたという。客殿は地震に耐えられず、建て替えることとなり平成27年に竣工したという。

参道入り口左手には観音山と呼ばれる小さな丘があり、そこに平将門の碑が建っている。右手には弘法大師四国八十八箇所 石下大師霊場が広がる。天明の飢饉の救済事業として小口家が菩提寺境内に大きな池を掘り、その中に四国をかたどった島を作り、小橋で渡ると、寄進を募り八十八の小さな祠を建て、石下に居ながらの巡拝霊場が誕生した。

今でも毎月二十一日には縁日が開かれている。

また、西福寺ならではの行事が八月十四日の墓施餓鬼。夜八時から本堂で歴代住職と開基小口家の追善法要を行った後に、僧侶が四人一組四班に分かれ、およそ七百ある墓を回ってお経をあげる。檀家のほとんど、九五%が自分の墓の前で待っていて、読経後墓域内で食事をするという。子供たちは花火をしたり、夜のピクニックに大喜びと、お寺と檀家をつなぐ特別で大切な行事だという。

駆け足での西福寺、中寫住職、中寫家の紹介となったが、西福寺はその成り立ちから今日までまさに地元、新石下の寺として多くの檀家さんに支え続けられ、それに対して家族一同でしっかり応えている。

今回の御忌唱導師はそうした檀家さんへの恩返し、ということなのか。特別にいただいた桜色のぐい呑みに西福寺檀家の山中酒造の名酒、一人娘を注いでいると、そんな想いが湧いてきた。

（ルポライター）



西福寺に残る史跡で有名なのがこの平将門の碑

もし食ひやくみせんと欲する時、七宝しつぽうの盃はつき器、自然じねんに前に在り。
百味の飲食おんじき、自然ようまんに盈満す。
(中略)

『無量寿經』卷上

食事を摂りたいと思えば七宝でできた食器こつぜんが忽然と目の前に現れ、(中略)
様々な食べ物や飲み物が自ずと山盛りになって現れる。

(浄土宗総合研究所編『現代語訳 浄土三部經』参照)

今年のミニトマト

「うわあつ、ちっちえ」

絶対そう言われると思っていた。拙寺駐車場の片隅で鉢植え栽培している「ミニトマト」のことだ。昨年の晩夏、法類の寺の若住職が拙寺駐車場に車を止めに来た。いつものことだが、またまたその時、私が鉢植えのそばにいた。そのせいか、彼は私に近付き、「榮輝さんが育ててるミニトマトって、それですか?」と挨拶がてら尋ねてきた。

これが、じつに間が悪かった。よりによって一番見せたくない人物が登場したからだ。だって彼の寺は長野市の郊外にあつて、境内に隣接して少々の畑があり、彼はオクラだ、ナスだ、ジャガイモだ、ネギだと、なんやかやと耕作していて、野菜作りはお手のもの。大ベテランなのだ。それに比べ私はただホームセンターで苗と肥料入りの培養土を買い、鉢植えにして水やりを楽しんでいるだけのビギナー。それでも夏の初めはいくらかミニトマトらしいトマトが採れていたのだが、秋が近づくにつれ段々に粒が小さくなり、終いには小指の先くらいの大きさにしか実らなかつた。「こりゃ、いくらなんでも小さ過ぎだな」と思っていた矢先に彼が登場したのである。

私より少々年下の彼は正直者で、相手が親しければ親しいほど思ったことを

ズバリと口にする。彼の批評眼に止まれば、私のミニトマトなどひとたまりもない。案の定、冒頭の言葉を投げかけてきた。でも、その後は柔和な顔つきで「また来年も植えるんですよ」と笑いながら車を置いて立ち去って行った。

季節がめぐり、今年も新緑の眩しい頃となった。法類若住職の予想通り、性懲りもなく私はホームセンターまでミニトマトの苗を買いに行った。苗を物色しながら、去年の彼の言葉が脳裏に蘇える。「てやんでい、今年はブリッブリのミニトマトを作ってみせる」と意気込んだ。そして私は何か工夫せねばと、培養土とは別に肥料を買ってみた。肥料入りの培養土にまた肥料を混ぜ、苗を鉢植えにした。でも、そこが素人の素人たる所以だった。

数日が経った。苗の様子がどうもおかしいのだ。元気がない。さらに数日後、葉の先が枯れ出している。取扱説明書など面倒でとても読む気になれないタイプの私だが、事ここに至って、ようやく肥料の袋に書いてある能書きを読んだ。肥料の分量の目安とともに、「肥料のやり過ぎは枯らすことがあるので注意」と書いてあった。どうやら肥料が多すぎたらしい。法類若住職の顔がまた浮かんできた。慌てて培養土を買い足し、鉢植えの土を入れ替えた。

極楽浄土では、食事を摂りたいと思えば金や銀や宝石や珊瑚や真珠でできた

食器が忽然と目の前に現れ、さまざまな食べ物や飲み物が自ずと山盛りになっているという。その食べ物、飲み物を極楽の住人は食べるわけでも飲むわけでもない。ただ眺めるだけ。でも、それだけでお腹がいっぱいになり、満足すると、その食べ物、飲み物はすっと消え去るという。

こうした説示は「阿弥陀仏に具わる功德の具現化を表している」とでも指摘できるが、それでも気になるのだ。その器の上には、いったいどんな食べ物が見れるのだろう。百味って何だろうか。プリップリのミニトマトはあるだろうか。ツヤツヤのナス、青々としたオクラ、瑞々しいキュウリ。極楽にも野菜作りの名人はいるのだろうか。

誰もが食事に困ることはない。それが極楽浄土であると経文を読み取ってきた。でも、もしかしたら誰でも上手に野菜やら果物やら育てることができるところなのかもしれない。

さて、今年のミニトマト。件の若住職は何と言うだろうか。「うわあつ、ちっちゃえ」とは言わせない。

(袖山榮輝)

江戸の川 を歩く

第十四回

江戸ウオーカー
森清鑑

神田川水系 外濠

神田川水系は、関口大洗堰から江戸川と呼ばれ、船河原橋（飯田橋）から外堀に流れ込んでいる。ここで水流は二手に分かれ、一方は、東へ、いわゆる神田川として大川（隅田川）に注ぎ、もう一方は、南に下り、江戸城郭の西側を包む、外濠に利用されている。この外濠は、江戸を守る重要な役目を持つ。ために堀は深く掘られ、高い石垣を持ち、堅牢な見付（見張り所）

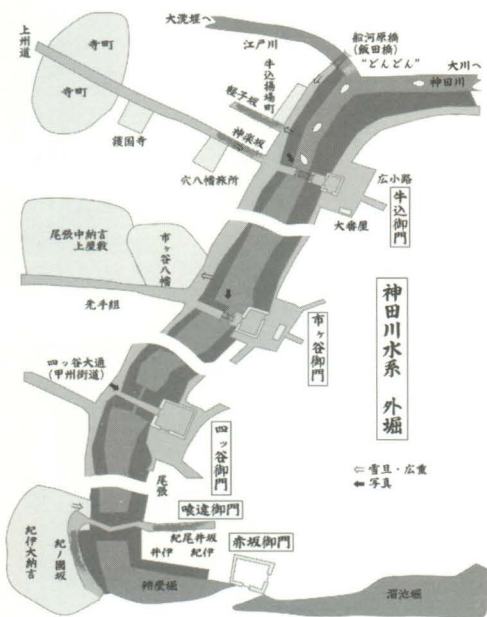
が配置されている。このように、神田川水系は、最後には、江戸を包む外濠として活かされているのである。船河原橋の下には、堰がある。水は、勢い良く流れ落ち、その落下音が周辺に響いている。これを江戸っ子は、「どんどん」と称した。「どんどん」といえば、そこには堰があり、貯まった水が勢い良く滝のように流れ落ちる様を思い浮かべていたのである。水流に加速度が加わり、流れは、南にも行く。江戸城郭の西側を包む外濠は、防御の重要拠点。家康以来の、幾度も

の大工事により、堅牢な堀が築かれている。高い石垣が聳え、豊かな緑の景色。そして堀の周囲には、侍屋敷（旗本、御家人）が密集している。

牛込揚場町

しかし、船河原橋から、次の牛込御門までの、舟の右手の堀堰堤は低く、船荷の揚場が設けられている。かくて牛込揚場町が形成されていく。世の中安泰となった、一六五九年。当地に揚場が設けられ、大川から直接、神田川伝いに物資が運ばれるようになる。揚場町には、船宿、酒問屋、料理屋、各種の店が並び、大繁盛。後年、その流れは、神楽坂まで伸び、花街が形成されていく。雪旦は、江戸名所図会「牛込神楽坂」で、広重は、「どんどん」でこの情景を、団扇絵に描いている。雪旦は正確に描いている。街側の堀の堰堤は、低く、荷揚げしやすいような斜面構造。荷揚場は描かれていないが、引き揚げたばかりの荷が積み上げられ、運搬のたいはち車が置いてあり、見張りの自身番が建っている。その道向こうには、軽子坂の入り口が描かれ、右の家並みが牛込揚場町である。軽子坂の

由来は、船荷を軽籠に入れ市中に運搬する職業人がこの辺りに沢山住んでいたところからついた名。揚場町の店の前にも来たばかりの荷が置かれてある。軽子坂から左は、土岐備前守の屋敷。そして、神楽坂。大勢の人が、段状の坂を登っている。坂を登ると、左に穴八幡旅所があり、このお神楽の音が神楽坂の語源と云われる。上り詰めると毘沙門天善国寺があり、そこか



ら牛込寺町が広がる。この坂の先は、江戸六街道の「上州道」（早稲田通り）。一方、広重の団扇絵「どんどん」は、揚場町の舟宿「茗荷屋」から出てきた若旦那と芸者が船に乗り込もうとしている図で揚場町の雰囲気や良表現している。広重は絵の中央に「どんどん」を描き、奥の左に牛込御門を描いているが、「どんどん」は、この位置にはない。団扇絵だけに、辺りの雰囲気やまろごと合成して描写したと思われる。彼一流の技である。ともあれ、この揚場から遊覧船に乗り、神田川を浅草まで、行く客も多かったのである。すぐに、堀の正面に高い土塁と石垣が現れる。そして堅牢な牛込御門が聳えている。船はここでストップ。いわゆる「船留り」である。

牛込御門

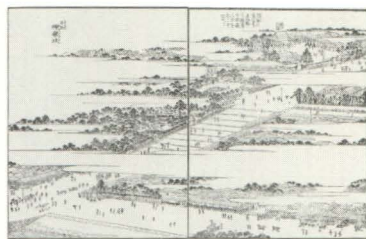
道から突き出た高い土塁と御門の石垣の狭い間を水が通る。その上に短い橋が架かっている。渡ると、さらに高い石垣を柵形に組んだ御門が聳えている。いわゆる柵形御門は、敵が橋を渡って攻め込んできても、逃げ場を失い、囲み櫓の三方から一斉に攻撃される構



◆牛込御門の写真



◆柵形見付門の構造



◆江戸名所図会「牛込神楽坂」左下に堀と斜面土手。中央に積み上げた荷と自身番屋。外濠通りと牛込揚場町（絵の右下）。



◆広重団扇絵「どんどんノ図」

造になっている。特に江戸初期には、重要な城門番兵の見張り所でもあり、これを見付と称した。枅形門の内側には、広小路（広場）が設けられ、そこにも番兵が控える大番所が設置されている。牛込御門の警備には、鉄砲を始め、一通りの武器が備えられ、三千石以上の旗本が三年交替で勤番していた。その光景は、正に江戸城の一角を忍ばせる。近在に住む旗本、御家人がこの橋を渡って登城している。

逆に御門から外に出ると、上州街道（早稲田通り）で神楽坂。江戸時代、坂の周囲は、おおむね御家人、旗本屋敷で所々に町人町が点在し、坂を登ると、牛込の寺町が展開する。この辺り、明治以降に花街になる。広重は、神楽坂から逆に御門を描写。当時の雰囲気がよくわかる。

市ヶ谷御門

牛込御門前の橋の下を通過した神田水系の流れは、下つて次の堀に流れ込む。ここから堀の幅は、俄然広がり、深みも増す。外濠通り沿いの土手はそれほど高くはないが、江戸城郭沿いの石垣、堤は高い。辺りは、

武家屋敷の密集地帯であるが、外濠通り沿いには、船河原町や田町一〜三丁目の民家が見えてくる。ほどなく、市ヶ谷御門に着く。

ここも高い石垣と土塁が両側から突き出て、掘りを塞ぎ、中央にV字型の狭い石垣水路があり、その上に橋が乗っている。一段と低い次の堀へと水は流れ込んで

いる。橋から見下ろすと、堀水は遙か下を流れている。水面には蓮の葉など水草が一杯漂っている。市ヶ谷御門は、さらに高い石垣に囲まれた枅形御門だが、その構造は、地形の関係から牛込御門とは異なる。枅形でも横に広がり、通行人は正面の高麗門を潜ると、左斜めに直進して通り抜ける構造になっている。それだけに、侵入敵を袋のネズミにして攻撃する枅形ではない。したがって、門前の広小路（広場）は広くとってあり、大番所の規模も大きく、大勢の警護武士が詰



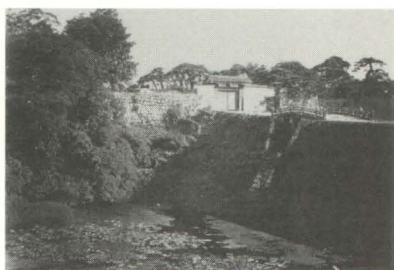
◆広重 神楽坂から牛込御門を見た図

めている。当然周囲は、旗本屋敷が取り巻いている。

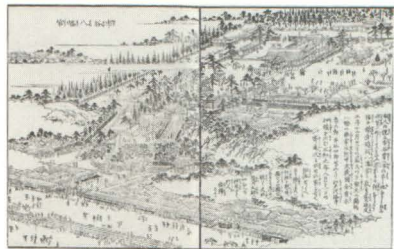
御門から堀を渡って外に出ると、通り沿いに民家が並んでいるが、その背後から市ヶ谷台地が迫り上がり、堂々たる規模の市ヶ谷八幡（別当、東円寺）の社。太田道灌がここに移し、家康から家光が大造営した。要塞のような寺である（市ヶ谷八幡町）。ここにも「時の鐘」を告げる大鐘楼があり、辺りにその音を轟かしていた。そして、寺の西側には、広大な徳川尾張中納言の上屋敷（防衛省）が睨みをきかせている。この屋敷の下、つまり南側一帯は、御先手組（治安維持）の大縄地で、警護怠りなし。

四谷御門

四谷御門は、内堀の半蔵門から来る道と直結し、門から先は甲州街道に繋がるのであるから、極めて重要な見付である。いざという時に、將軍が甲府城に逃れるための退路門でもある。それだけに堀を遮る土塁の通路幅も広い。広い土塁が堀を塞いでおり、堀から堀への水路の幅は、極端に狭く、細長い。四谷御門は、典型的な枅形御門で、広小路からは、徳川尾張中納言



◆写真「堀から見た市ヶ谷見付門」



◆江戸名所図会「市ヶ谷八幡宮」左下外濠通り。市ヶ谷台に広大な八幡社が迫り上がる。

の拝領屋敷、井伊掃部頭直弼の中屋敷、東に隣接して徳川紀伊の上屋敷が連なり、鉄壁の備え。極めて長く、狭い水路を通過した堀水は、次の堀に流れ込む。堀の左には、徳川尾張中納言の屋敷が見え、右側には、旗本屋敷、出雲松平家屋敷、お持ち組大縄地が広がる。そして喰違見付に出る。

喰違見付

喰違見付には、橋もなく御門もない。高い土塁が聳

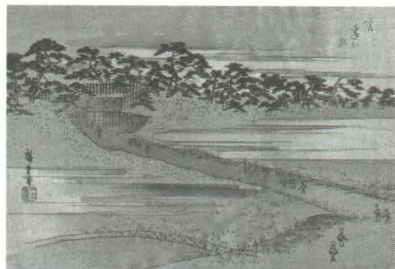
え、堀を塞いでいる。土塁の上の道の両端は角度がついて、食い違っている。つまり、入り口の道はやや左に、堀上を通過して簡易門の前は右に折れ曲がっている。これが、喰違見付。戦国時代の虎口構造。こゝは、両方の谷から迫り上がった高台であったため、ぬきんでて高い土塁を利用したのである。最も古い見付で、土塁の両端を、徳川尾張、紀伊そして井伊家が固めたのである。門を抜けると紀伊国坂。高い地形を利用して、見張り台が最初に置かれた場所と思われる。土塁の西側には広大な徳川紀伊の屋敷が広がる（赤坂東宮御所）。赤坂方面に下る坂が紀伊国坂である。神田川水系の外濠の流れは、ここで止まる。

それからの外濠

次に続く弁慶堀は、櫻川、紀伊、井伊などの屋敷からの湧水、谷水が流れ込んでできたもの。そして赤坂御門からの外濠は、あちこちからの湧水で天然の池ができ、そこに麴町、鮫ヶ橋、清水谷、櫻川など赤坂周辺の谷川が流れ込み、いわゆる大池となった溜池を利用したもの。溜池から溢れた水は、江戸城、南の外濠



◆写真「四谷御門」



◆広重「喰違御門」

となり、汐留橋から浜離宮、江戸湾に入る。したがって溜池は、汐留川の源流である。

【参考文献】

大江戸歴史散歩を楽しむ会

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第八十回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

さらば、愛しきドイツの女よ②



自由思想団での出会い

前回、渡辺海旭の書簡から「それらしきドイツ女性」のあぶりだしを行なったことで、海旭が理想とする女性がどのような人品骨柄なのか、おわかりいただけたのではなからうか。すなわち、アルザスの片田舎の農婦然とした牧師の妻、ベッケル夫人風である。ただし、誤解なきように記しておくが、彼女が「その人」だといっているのではない。そもそも夫人は異教の親友の妻であり、しかもとうに鬼籍に入っており、彼女が自ら身を引く形で海旭に帰国を促せるわけがない。彼女が他界して後にこれほどまで称揚したのは、ベッケル夫人に仮託をして、「生涯忘れ得ぬ人がある」「あなたを私は忘れることはない」という海旭一流の頼晦のメッセージとみるべきだろう。

ならば、牧師夫人に容貌も人柄もよく似たドイツ女性とは、いったいいかなる人物なの

か、どのような経緯で二人は出会い、そして別れたのか？

さらにわが妄想力を逞しくすることをお許しねがって、筆を先に進めようと思う。そして、その女性については、筆者の妄想の産物であることから、謎解きミステリーにならって「X嬢」と記すことにしよう。

*

X嬢と海旭との出会いは、自由思想家団の集まりであった。

「自由思想家団」とは、狭義ではビスマルク治世下にドイツに誕生した、左右の政治集団とは一線を画した独立不羈のリベラル勢力で、「自由思想家党」を名乗ったが、どうやら海旭にとっては、この時期ドイツやフランスなどヨーロッパの先進諸国に生まれた言論グループのことであり、ドイツでは自由思想家党にシンパシーを抱く人々たちのことのようにであった。

宗教を偏見にとらわれることなく自由に語

ることができ、参加者は無神論者だけでなく、社会主義者や唯物主義者、原始キリスト教徒、キリスト教革新派などまさに多士済々。海旭にとつては、さながら生きた比較宗教学の「知の闘技場」であつた。海旭は、持ち前の行動力と人懐こさで異教の人々と交わり、知的刺激を受けただけでなく、多様な人脈を広げ、その中で件のX嬢と出会つたのではないかと思われる。

海旭はこの自由思想団の自由闊達な作風が、留学直前に高島米峰ら宗教界の革新に燃える若手仏教徒とともに立ち上げた「新仏教同志会」に似ていると、いたく感じいつて、高島にこう書き送っている。

「一体新仏教会と此の地の自由思想団とは、非常に似て居るが、ひとつ違ふ所は、自由思想団では学者と云ふ側の人が多くて、実業家が多数派を占め、切符切りとか電鐵の車掌とか郵便配達夫とかいふ方面の人が可成に居つて、堂々と宗教や哲学や時事問題に関して熱

心に意見を吐露することだ。これは確に独逸社会教育の結果でもあらうが、新仏教会も伊勢屋の旦那、勉強屋の番頭は勿論、車屋の八公も土方の熊公もドシドシやつて来て、熱心に意見を吐く様にならなくては面白くないぢやないか。坊主上がりや雑誌本や演説使いの有象無象の面々、大天狗や小天狗の鼻競べに寄つてたかつて勝手氣儘の熱を吹きやつた所が、どれだけのことがあるものか……」（『壺月全集』下巻、四二四―四二三頁）

夏目漱石をはじめ海旭と同時期にヨーロッパへ留学した日本人の多くがそうであつたように、彼の地の事象について、それが何事であれ全面賛美はせずに、深い洞察と懷疑をもつて、批評的にとらえるのを常とした。海旭もそうであつたが、この自由思想家団だけは、めずらしく全面賛美で、高島からは私信で、「渡辺、きみは無神論に宗旨替えをしたのか」と茶化されるほどであつた。

自由思想家団への海旭の肩の入れようは大

変なもので、おそらく大学の研究室に閉じこもっていたら、X嬢との出会いもなく、彼女に対して、議論の上での意気投合を超えた特別な感情を覚えることもなかったであろう。

なぜ、小乗でなく、大乘か？

しかし、海旭とX嬢をむすびつけたのは自由思想家団の「自由闊達」な議論全般ではなかった。二人を強く惹きつけ合ったもの、それは大議論のなかでも、仏教、それも「大乘的仏教」への言及であった。

海旭が自由思想家団の集まりの新人メンバーに迎えられて二月ほどした「月例会」で、東洋の島国からやってきた学僧に、冒頭の「問題提起」の役が回ってきた。そこで海旭はかねてから不満を抱いていたドイツをふくむヨーロッパにおける仏教のありようについて、次のような持論を開陳したのである。

「ここ欧州の仏教は大学の教室における仏教、専門家や研究家の書斎仏教です。いささ

かくだけたところで、せいぜいがインテリたちが集う社交家や芸術家らのサロン仏教。とりわけここドイツにおいてはそうです。それは、アジアの仏教界の僧侶たちが布教にやってきて広まったのではないからです」

「インテリのサロン仏教」を自分たちの議論への揶揄ととったらしく、女性が席をすくと立つと異議を唱えた。その人こそがX嬢であった。

「ワタナベ、それは間違っているわ。いや、正確にいうと半分あっているけれど、半分は間違っている。確かにアジアからは僧侶たちが仏教の布教にはやってきていないけれど、逆にアジアの仏教国へ出かけていって入信したドイツ人がいて、彼の影響で、ドイツには仏教の教会もできているわ」

いかにもドイツ人らしい理が勝った物言いに、海旭は反感よりもむしろ好感を覚えた。彼女のいう「仏教に入信したドイツ人」とは、セイロンで修行の末に欧州初の比丘に

なったニャーナティロカ。彼の存在は帰国前に萩原雲来から聞かされて海旭も知っていた。また、「仏教の教会」とは、海旭が留学して六年めの明治三十九年（一九〇六）にドイツで初めてつくられた「仏教伝道会」であり、その二年後にはニャーナティロカを名誉会長に戴いた「ドイツパーリ協会」が創設されている。

海旭はX嬢が着席するのを待って語りかけた。

「ご指摘のとおりだが、僕が言いたいのは、それすらも書齋仏教のなせるわざであると。ちなみにニャーナティロカは、将来を囑望された音楽家だったが挫折し、書物によって仏教にめざめたからです。ここドイツでは、ゲーテやワグナー、そしてシヨーペンハウエルなど文学や音楽や哲学の巨人たちが国民に仏教への関心を高めたが、ニャーナティロカも彼らの影響を強く受けた一人でした。さらに言うと、彼が帰依したのは、仏教のなかでも南

伝の『小乗』で、いわば悩める個人の救済を根本におくもの。これも彼の信仰が書齋仏教由来の証左と見ていい。いっぽうインドから中国を経由したわが日本に伝わったのが『大乘』。これは個人の救済の書齋仏教ではなく、社会全体の救済を求めるものです。そもそも僕には、社会の救済に熱心なヨーロッパにおいて、『大乘仏教』がさっぱり知られていないのが、大いに不満でならない。おそらくヨーロッパ諸国の植民地が南伝仏教国であつたことも関係しているのでしょうか……」

と、X嬢がまたまた席を立つと、こう訊き返してきた。

「ワタナベ、その大乘仏教とやらについて、もっと詳しくかせてほしいわ」

そこへ例会の幹事が割って入った。

「大変に興味深いテーマではあるが、いささか神学論争の深みに入る恐れなしとはしない。そこで、ワタナベ君、どうだろう。本会終了後、彼女に個人レクチャーをされたら」

会場から「異議なし」の声が多数あがった。残念ながら大乘仏教について関心を抱いたのはX嬢だけのようだった。

そこで海旭は大勢に従うこととし、例会がひけた後、X嬢と晚餐をともにすることになった。海旭はビールを、X嬢はアルザス名物の白ワインを掲げて乾杯すると、欲談もそこそこの、レストランには似つかわしくないお堅いレクチャーが始められた。いわく――「小乗教は涅槃の上に静的方面を考えるが、大乘は活動性を認める。力あり、光あり、絶えざる向上が大乘教の理想とする涅槃の境地である」

「小乗教は浮世を通れ山中藪林に隠れて、自らの救済を求めるが、大乘は利他のために身のすべてを捨てる」

「大乘教は社会生活を肯定し、無我、無常、涅槃の理想の上に、大なる反省と向上をもって、人生に臨むものなるが故に、現代の如き権利にのみ没頭し、争闘を事とする時代には、

最も適切な教である」

海旭が難解な仏教用語を平たく伝えようと苦心するなか、聞き役に徹していたX嬢は、半刻ほどしてレクチャーが一段落したところで、ワインを片手に掲げてこう言った。

「カイキヨク、とっても示唆的な講話だったわ。だったら、カイキヨク、ここドイツであなただけのいう大乘仏教を広めたらどうかしら。私も協力するから」

海旭に対するX嬢の呼び方が「ワタナベ」から「カイキヨク」に替わっていた。それに気づいた海旭の胸中には、海旭が称揚してやまないアルザスの片田舎の農婦然とした牧師の妻、ベッケル夫人のことが去来した。そして、このX嬢と一緒になら、異教の地で大乘の教えを広宣流布することができるのではないか。そう思い立ったのだった。

(つづく)

暑中お見舞い申し上げます

平成二十九年

浄土門主

総本山 知恩院

門跡第八十八世

伊藤唯眞

大本山 増上寺
法主

八木季生

大本山くろ谷金戒光明寺
法主

高橋弘次

大本山 百萬遍知恩寺
法主

福原隆善

〒606-8225
京都市左京区田中門前町一〇三

大本山清浄華院
法主

真野龍海

大本山善導寺
法主

阿川文正

大本山光明寺
法主

柴田哲彦

鎌倉市材木座六・十七・十九
TEL 〇四六七(二二)〇六〇三

大本山善光寺大本願
法主

鷹司誓玉

〒380-0851長野市元善町五〇〇

暑中お見舞い申し上げます

平成二十九年

浄土宗務総長

豊岡 鐸 尔

法然上人御誕生地
浄土宗特別寺院

美作 誕生寺

〒709 3002 岡山県久米郡久米南町里方八〇八
TEL (七二八) 二一〇二
FAX (七二八) 二一六二

(学)大乘淑徳学園
理事長

長谷川 匡俊

〒174 8645 東京都板橋区前野町五・五・二

学校法人 淑徳学園
淑徳SC中等部高等部

理事長
校長 麻生 諦 善

白本尊阿弥陀如来・
家康公念持佛

静岡 宝台院

住職 野上智徳

赤坂六地藏尊

浄土寺

住職 阿川正貴

〒107 0052 東京都港区赤坂四・三・五

鶏頭山安楽寺

飯田 實雄

〒399 4115 駒ヶ根市上穂栄町九・五
電話〇二六五 (八三) 一三三六〇

清水湊

忠高山 實相寺

〒112 0002 東京都文京区
小石川三丁目十四番六号

無量山 傳通院

電話〇三 (三八一四) 三七〇一 (代表)

家康公祖母の旧地

玉桂山 華陽院

住職 堀田卓文

勝願寺

〒365 0038 埼玉県鴻巣市本町八・二・三一
電話〇四八 (五四一) 〇二二七

お骨仏の寺

一心寺

〒543 0062 大阪市天王寺区逢阪二・八・六九
電話〇六 (六七七一) 〇四四四

暑中お見舞い申し上げます

平成二十九年

九品阿彌陀如来

浄
眞
寺

〒158-0083 世田谷区奥沢七、四一、三
住職 清水英碩

宮城県仙台市

定義じようぎ如来
西方寺

住職 大江田 紘義
前住職 大江田 博導

岩淵

天香山
正光寺

〒115-0041 東京都北区岩淵町三十二、十一

無縁寺

回
向
院

〒130-0026 東京都墨田区両国二、八、十
電話〇三(三六三四)七七七六

投込寺 浄閑寺

戸
松
秀
明

〒116-0003 荒川区南千住二、一、一二

古今伝授の寺

天主君山
願成寺

住職 魚尾孝久
〒411-0022 静岡県三島市川原ヶ谷十八
メールマガジン info@ganjoji.com

塩竈市 雲上寺

東
海
林
良
雲

五劫山

愚
鈍
院

〒984-0051 仙台市若林区新寺三、十二、十七

寿福山 寛慶寺

水
科
善
隆

〒380-0852 長野県長野市東之門町四〇六番地
電話〇二六(三三三)一八一二

大吉寺住職

成
田
昌
憲

〒154-0017 世田谷区世田谷四、七、九

梅窓院
住職

中島真成

東京都港区南青山
2-26-38
電話 03 (3404) 8447
ホームページ
<http://www.baisouin.or.jp>



「のらくろ寺」・「のらくろ和尚」
住職 飯島英徳

北海道室蘭市
満岡寺・善行寺
(0143) 22・4677・44・2695

暑中お見舞い申し上げます

平成二十九年

願行寺

佐藤成順

〒140・0004 品川区南品川二・一・一二

十八檀林霊場会
吞龍上人縁日（毎月八日）

蓮馨寺

住職 衆原恒久

〒350・0066 川越市連雀町七・一
電話 ○四九（二二二）〇〇四三
FAX ○四九（二二二）〇六七六

森巖寺

加藤昌康

〒155・0002 世田谷区代沢三・二七・一

光円寺住職

佐藤良純

〒112・0002 文京区小石川四・一二・八

浄土宗東京教区教区議会
議長

村山好信

良信院
〒135・0022 江東区三好三・七・五

鎌倉大仏殿

高德院

〒248・0016 鎌倉市長谷四・二・二八
電話 ○四六七（二二二）〇七〇三
FAX ○四六七（二二二）五〇五一

光取寺

大室了皓

〒141・0021 東京都品川区上大崎一・五・一〇
電話 ○三（三四四）八三八四

浄土宗東京教区
教区長

高橋誠実

無量寺
〒158・0097 世田谷区用賀四・二十・一

浄土宗東京教区教化団団長
浄心寺住職

佐藤雅彦

〒113・0023 文京区向丘二・一七・四

浄土誌上句会

●湯

〈特選〉湯殿から川へ無数のかざぐるま

山田 光博

鄙びた宿の湯殿から川が見える。河原には無数のかざぐるま。子供の玩具のかざぐるまは春の季語だがこの場合、強い哀切を誘う。水子供養のお地藏さんなどに供えるかざぐるまを想起する。無数は怖い。

〈佳作〉葉湯の薄緑色利休の忌

会田美禰子

春来たら春の湯吞を買いにけり

工藤 掉

たつぷりと蕎麦湯のありて日永かな

三島かれん

●島

〈特選〉島唄やふらここ高く低く漕ぐ

水嶋比呂実

かざぐるま、風船、凧、ブランコは約束事として春の季語である。ふらここはブランコの異名。奄美や沖縄の島唄の独特の節回しや

抑揚にあの遊具は似合う。グインやファルセツ
トに合わせ高く低く漕ぐのである。

〈佳作〉島ひとつすべて神域鳥曇り

遠山 幸康

東風吹くや明治初年の島流し

遠藤美紗緒

知月の父に供える島らつきよ

持田安祐美

●自由題

〈特選〉本殿のうしろの正面梅白し

赤松 麗奈

うしろの正面だあれ。「かごめかごめ」と
いう遊びを思い出す。昔は寺や神社の境内で
子供たちがよく遊んだ。うしろの正面は誰か
と思えば、そこには白梅が楚々と咲いている
のである。なかなかの風情である。

〈佳作〉花嫁が真つ白に立つ春の昼

秋山 登

春の日の乳房小さき弁財天

三井 有吾

網棚にまるめて載せる春コート

安西 瑞江



誌上句会〈編集部選〉

■湯

菜の花や湯女ら並んで湯を採めり
葛根湯じんわり苦し春の風邪
桜湯に父の潜水艦がいる
かんじきを付けて湯灌に急ぎけり
蛤の湯気を吐き出し開くかな
女湯ののれんは赤し暮れかぬる

大塚博文
飯田今日子
有沢仁美
和田忠司
目黒 裕
市田晃彦

■島

その臓器島のかたちにある臍
隠れ耶蘇の島に生まれて春田打つ
椿咲く島に郵便局ひとつ
散り初めて島倉千代子のな梅

松井明保
高崎実郎
廣田美知枝
新藤優樹菜

浄土誌上句会の お知らせ

締切・二〇一七年八月二十五日
発表・『浄土』二〇一七年十月号

応募方法

- いずれの題とも数の制限はありません。
 - 特選各1名・佳作各3名
- 葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

知事 自由題

島ごとに唄あり風の光るころ
半島の先濡れてをり春の暮

内藤香苗
新島左近

■自由題

亡き友や牌打つ響き夜の音
老人の出でくる春のエレベーター
春の鴨春の鴨よりパン奪う
ゆうれいのペンギンもいる春の山
うつむいて人形笑う春の闇
太陽を真上に梅の影一枝
風船の結び目ゴムの臍のよう

飯島英徳
野見山淳
宮坂梨華
野村亜莉沙
持田美紀世
蓮見克典
前田裕策

さっちゃんね

142 かい目

かまちよろう



かまちよろう先生作新聞四コマ漫画『ゴンちゃん』が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞)



編集後記

五月閣あどこまでもいつまでも 岱潤

都議会選挙が近づき、また首相にまつわる数々の疑念が噴出したことが一因なのか、慌ただしく国会が終わってしまっただ。そして最後に駆け込むように、与党は禁止手まで使い識者が皆監視社会の到来と危惧する「共謀罪法案」(テロ等準備罪)が通ってしまった。

安倍首相はこの国をどういう方向に持って行くかとしているのだろうか。まさか戦前の日本にしたいのかと、考えたくもないことを考えてしまった。

こんな事を書くこと自体、これから危険行為で、政府に反発する者は、悉く

監視されて行くことになるだろう。

こんな時代の中で思い出すジャータカがある。「小鳥と森の火事」の話だ。あるとき森が大火事になり、一斉に動物たちが逃げ出す。しかし一羽の小鳥、それも羽にけがをしている小鳥が、池に行き身体を水に浸すと、火事の現場に戻って、身体を揺すり二、三滴の水をかける行動を続けている。他の動物たちは皆、そんなことをやっても意味はない、危ないからやめろと言うが、小鳥はひたすらにその行動を続けている。

小鳥は言う「この行動に意味がないことはわかっています。でも今私は何かしないではいけないのです」

雑誌『浄土』

特別、維持、賛助会員のの方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
 巖谷勝正(目黒・祐天寺)
 魚尾孝久(三島・願成寺)
 大江田博導(仙台・西方寺)
 加藤昌康(下北沢・森厳寺)
 桑原恒久(川越・蓮馨寺)
 桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
 佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
 佐藤成順(品川・願行寺)
 佐藤良純(小石川・光園寺)
 東海林良雲(塩釜・雲上寺)
 須藤隆仙(函館・称名寺)
 高口恭典(大阪・一心寺)
 中島真成(青山・梅窓院)
 中村康雅(清水・実相寺)
 中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
 野上智徳(静岡・宝台院)
 藤田得三(鴻巣・勝願寺)
 堀田卓文(静岡・華陽院)
 本多義敬(両国・回向院)
 松溝泰彦(芝・寶松院)
 真野龍海(大本山清浄華院)
 水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

先日寺に来た小学生から質問された。「お坊さんの仕事って何ですか？」とつさに「人々に寄り添うことです」と応えたが、それ以来ずっと考えている。我々は何をすべきか？ (長)

編集チーフ
 編集スタッフ

長谷川岱潤
 斎藤晃道
 佐山哲郎
 青木照憲
 村田洋一

浄土

八十三巻七・八月号 頒価六百円
 年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
 印刷 平成二十九年六月二十日
 発行 平成二十九年七月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 暁印刷

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四七四明照会館四階

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三七八)六九四七
 FAX 〇三(三三七八)七〇三六
 振替 〇〇一八〇・八・八二八七

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名 () を入れる・入れない
※関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※消費税と送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

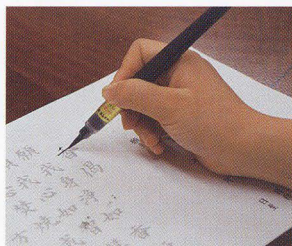
《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

檀信徒の皆様へ

写経 セット

浄土宗勤行の解説も付いた12枚組

浄土宗の日常勤行式が
写経になった!! 写経後は
オリジナルの経本
にもなります。

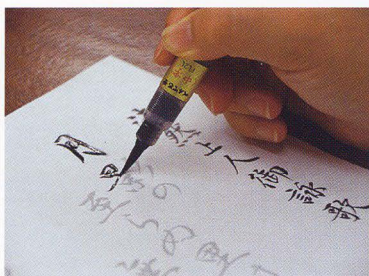


薄墨手本をなぞる
オリジナルA4判

詠唱会
の皆様へ

写詠歌 セット

宗歌「月かげ」と春夏秋冬の和歌
解説付き5首セット



詠唱でお唱えする歌、
法然上人のお歌を
筆で写して心に刻もう!

当会オリジナル新商品!!

法然上人を心から慕う
法然上人鑽仰会だから
こそ作れる高級奉書の
オリジナル手本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。